

日本語学習者による非母語話者の作文に対する評価について

長谷川 哲 子

Peer evaluation of compositions written by undergraduate
JSL (Japanese as a Second Language) learners

HASEGAWA Noriko

1. はじめに

近年、大学生レベルの文章表現教育の重要性が高まる中、日本語教育の場面でも、ピアラーニングを援用した文章作成が注目されている。このような文章作成の過程においては、日本語学習者が相互にどのような評価を行うのかという観点が必要になる。そこで、評価される側となりがちである日本語学習者が、非母語話者の作文に対して、どのような評価を与えるかを探るための手がかりとして予備的な調査を行った。本稿は、その調査結果の概略を報告するものである。

2. 先行研究

これまでの日本語教育においては、書く能力は4技能のうちの一つとして重視されているものであるが、近年、日本語非母語話者や日本語学習者のライティングに対する注目がとみに高まっている。それにつれ、日本語学習者のライティングについては、様々な見地からの知見が蓄積されつつある。

日本語学習者による作文とはどのようなものか、その内実を評価、誤用、および対照言語学の観点から考察したものとして、宇佐美(2007)がある。また、ライティングの評価という側面からは、田中真理(2007)において、日本語における第二言語でのライテ

平成20年6月30日 原稿受理
大阪産業大学 教養部

ングについて、good writingという観点から、日本語ライティングの評価基準が実証的に作成されている。さらに、実際の指導場面に資する提案として、ピア・ラーニング、特に作文教育をめぐっては、ピア・レスポンスの導入が提唱されている(池田・館岡2007: 71-109, 大島他2005)。

ピア・レスポンスの導入については、授業実践を通じた研究も見られる。田中信之(2005)は、ピア・レスポンスを取り入れた作文授業において、その受講者からのコメントを調査、分析したものである。ここで、調査対象となっているのは、日本語能力試験2級程度の中級レベルの中国人学習者である。これらの被験者においては、ピア・レスポンス活動を通じて、相互のコメントのやりとり、およびその効果について、否定的なビリーフを示す被験者がいた一方で、相互の作文を読み合うことには肯定的なビリーフが示されている。このことから、ピア・レスポンスの授業場面への導入やその効果については、さらなる実践活動と事例検証の余地があると考えられる。

また、原田(2006)は、中級の学習者に対して、ピア・レスポンス活動を経た作文プロダクトを通じて、ピア・レスポンスの効果を検証するものである。ピア・レスポンスと教師添削のそれぞれがどのように作文プロダクトに作用するかを調査した結果からは、中級学習者の作文推敲過程においては、教師添削に比べて、ピア・レスポンスのほうがより有効であることが示されている。

上記に挙げた先行研究以外にも、ピア・レスポンスについては、実際の授業活動への導入例、および、その導入効果に関する研究が散見される。しかし、そもそも、こうしたピア活動において、相手の学習者の作文を読んだりコメントを与えたりする際には、学習者はどのような点に注目して相手の作文を評価しているのだろうか。このような、評価者としての学習者の視点を明らかにすることは、学習者自身が相互に評価者となり得るピア・レスポンス活動をめぐって、そのより効果的な実践方法の探究につながると考えられる。

本研究では、このような考えに基づき、学習者が日本語非母語話者の作文をどのように評価するかという点に着目して、学習者による相互評価の一端を明らかにするための調査を行った。

3. 調査の概要

今回の調査の目的は、日本語学習者である留学生が、非日本語母語話者が日本語で執筆した作文に対してどのように評価するのか、また、評価に際してどのような点に着目するのか、その一端を探ることである。

調査は2007年12月に、日本の大学で学ぶ留学生38名を対象として実施した。評価を行う

作文として、国立国語研究所作成の「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」所収の作文の中から、大学教員を対象とした作文評価の調査（長谷川・堤（2007a,b））において、評価の高かったもの（以下、作文A）と低かったもの（以下、作文B）を1例ずつ選んだ。その作文例の本文を下に示す。

作文A

タバコ問題に関する意見

タバコに関する問題は印度でも日本と同じように存在しています。私の家族でタバコを吸う人がいませんが、家で来たお客や乗客がタバコを吸ったら困ります。タバコを吸ったら、吸う人ばかりでなくとなりの人もはいがんで困るからバスやレストランなどで吸わない方がいいと思います。

タバコというものは体に有害ばかりで何の益もないから、吸う人がやめた方がいいと思います。近頃、若者の間でタバコの好きな者がだんだん増えているが、何か対策をとらないと、はいがんで患う人が増えていきます。

でも、禁煙というような規束を実施するだけでこの問題をとくことが出来ません。私の考えによって、例えばタバコを吸わない方、特に学生達が集まってタバコが体を与える有害を宣言した方が有効だと思います。その上、今肺談の患いで困っている方でもご一緒になって自分のつらい経験を宣言すれば、タバコを吸う方がタバコはそれほどまで有害を与えているかを信じて次やめると思います。

それで、すぎの世代でもこの癖に陥らないように気をつき、タバコ広告を放送しない方がいいと思います。

作文B

たばこ…

どこでも問題になっている。たばこをすっている人々色々種類である。第一はなやんでいる時安心するためにすっている。第二は金持ちの人々の要用になっている。第三は興味を持って一度をすって好になったなどたくさんのげいんがある。法律ではたばこをすうことをなんと書いているかもしれないけれども私にとってはたばこをコマーシャルすることはだめだと思う。そうするとなん度も新聞にコマーシャルをしていたことを見ていた。人々はたばこは健康に悪いと知っていたけれども吸う人々がど

んどん増えている。まだたばこの悪い影響でたくさんの恐ろしい病気が増えている。例えば肺炎、一番悩まされていたのはストレプトチルデンもたばこをするひること。そして女の人はやせるためにたばこを吸うのはばかだと思う。ここで私はたばこの悪いことを述べている。たばこのよい影響を知らないからだ。

まだたばこの生産はその国の一つの生産と、輸出となっている国もある 悪い影響が多いけれどもたばこの種類が増えている。まだたばこをすっている人は環境をよごれている。吸って終わったらそのところにすてる。それを塵箱に入れたらいい。たばこをすって仕事をおくれることもある。それからたばこの悪いことを覚えて、吸うことしないようになった人もある。その人々一つの話では「私はたばこを買った金を集めたら、今、二階の建物、車を買うことができますね」と言っている。たばこは色々なことにえいきょうしているのを見られている。生活、仕事、体などで。

私の聞いたことでたばこのきょうそうもあるそう。例えば「だれがたばこを速やく吸うか、「だれが一度どれぐらいたばこを吸うか」などたばこのレコードが「世界のめずらしいの本」に書いている。

みなさんすいえいすることをきんして 安心にくらしたい。

長谷川・堤(2007a,b)では、上記の作文AおよびBを含む作文例20編に対して、大学教員(日本語学・日本語教育学を専門とする教員[以下、日本語教員]6名、それ以外を専門とする教員[以下、専門教員]10名)に、「1非常にわかりにくい、2わかりにくい、3わかりやすい、4非常にわかりやすい」の4段階で評価してもらった。その結果、作文Aの評点の平均は3.13(日本語教員)、および、3.10(専門教員)であった。作文Bの評点の平均は1.75(日本語教員)、および、1.80(専門教員)であった。

これら二つの作文を日本語学習者である留学生に提示し、どちらが分かりやすいか、選んでもらい、そのように判断した理由は何かを記述してもらった。

4. 調査結果

調査の結果、留学生38名中、作文Aのほうが分かりやすいと回答した者は30名、作文Bのほうが分かりやすいと回答した者は8名であった。

以下では、作文例別に、それぞれの評価の理由として記述されたコメント例を挙げる。なお、コメント中の表記・表現は、原文どおりに記載する。

1) 作文Aのほうが分かりやすいと思った理由

①作文Aに言及したコメント

- ・ 短かいから見やすい
- ・ 段落をちゃんと分けている
- ・ 文章が、「自分の意見」「その理由」「対策」「まとめ」の形ではっきり書かれている
- ・ 作文Aの方が間違いが少なかった上に、構成の流れがわかりやすかった
- ・ 文法が少ないし、言葉が簡単だし、ややこしい部分がない

②作文Bに言及したコメント

- ・ トピックとトピックとの関係がなくて、段落はちゃんと作られていなかった
- ・ 中心的な思想がわからなくて、何かが言いたいことが知らせないと思われる
- ・ 情報が多すぎてちょっとわかりにくいと思う
- ・ ミスが多かった
- ・ 書いた人が忙しくて、急に書いたような気がします
- ・ 書いてあることはあまり面白くないし、文法もおかしい

2) 作文Bのほうが分かりやすいと思った理由

①作文Aに言及したコメント

- ・ 丁寧の「ます形」を使っているが、普通の会話や文章に適用しないため逆に理解しにくいだ
- ・ まとめはないからめちゃくちゃになってしまっていたと思う

②作文Bに言及したコメント

- ・ 辞書形を使って、普通の論文やレポートみたいに書いてあるので、学生にとってもっと理解しやすいだと思う
- ・ 具体的に例をあげて解説するとわかりやすい
- ・ 論点を最初に出して、その次に「第一は…、第二は…、第三は…」区別がはっきりして、論拠をのべたから
- ・ たばこの問題について詳しく説明してくれます。そして、様々な人はなぜたばこを吸うも紹介してくれます。それから、たばこの吸う悪いことを述べます。順序がよくて、分かりやすいと思います。

以上のコメント例をまとめると、まず、作文Aのほうが分かりやすいと判断した場合、作文Aに対して、全体の量が短いこと、内容の展開や段落の構成が良いこと、さらに文法

的な誤用の少なさや語彙の平易さについてのコメントが目立つ。また、作文Bについては、内容のポイントが不明であることや文法的な誤用の多さが指摘されている。反対に、作文Bのほうが分かりやすいと判断した場合には、作文Aについては、です・ます体の使用を指摘しており、一方で、作文Bに対しては、です・ます体を使用しなかったこと、具体例が多く挙げられていること、列挙を表す表現により順序が示されていたことに言及するコメントが散見された。

5. 考察

上記の調査結果をめぐって、作文Aと作文Bの比較を通じた評価の判断理由について、長谷川・堤(2007a,b)において得られた大学教員によるコメントとは、どのような違いがあるだろうか。以下では、それぞれの作文に対する教員のコメントを示し、留学生によるコメントの視点との違いを考察する。

1) 作文Aに対するコメント

- ・段落ごとにうまくまとまっている。
- ・論の流れ、文の流れがスムーズである為、文法的間違いが多いものの文章としてはわかりやすい。
- ・各段落ごとの論旨が明解である。
- ・自分の意見に対する理由を示しながらはっきり反対であることを示している。
- ・語彙の最適さはおちるが、うまくパラフレーズして書いている。
- ・主張点があいまい。タバコが体に悪いということ。それを“宣言”すること。広告をやめること、という三つのポイントがうまく結びついていない。

まず、作文Aについては、日本語教員、専門教員ともに、内容面や段落構成を肯定的に評価するコメントが多い。この点は、留学生によるコメントと同様である。また、文法や語彙の誤用に言及するコメントも見られたが、論旨の明快さや言い換えによって、そうした誤用が分かりにくさの要因として挙げられることはなかったと考えられる。ただし、文法や語彙に関して、留学生がその平易さをプラス評価していたのに対して、教員においては、そのような評価は見られなかった。

2) 作文Bに対するコメント

- ・導入部はやや不自然だが、各段落において主張したいことがわかりやすく構成されて

おり、具体例も多いため、誤りが多いことはさほど気にならない。

- ・様々なことを述べていて、全く主張点が分からない。
- ・話題が多様すぎてわかりにくくなっています。
- ・結論と、それに至る過程の部分が一致していない。
- ・伝えたいことが何で、それを言う為に、何を書いているのか、理解できない。
- ・喫煙することによる問題を列挙しているがそれぞれの記述のつながりが悪かったり唐突であったりして論拠としてやや弱い。
- ・各文に文法的、語法的な間違いがあり、それが最初から最後まで続くため。
- ・多くの不適切な用法のために、文意をつかみきれない。
- ・肝心の一番最後の文が意味不明になっているのも、全体のわかりにくさを強調してしまっているように思われる。

上に示したように、作文Bに対するコメントとしては、内容の散漫さ、構成における一貫性の不足を指摘するコメントが大半であった。このことから、作文Aのほうが分かりやすい、と評価する場合には、作文A、Bのいずれに対しても、内容や構成に注目していることは、教員、留学生に共通している。また、文法的な誤用に関しても、教員、留学生のいずれもが言及しているが、作文Aと異なるのは、それが内容の理解を妨げているかどうか、という点である。作文Bの場合には、段落構成や内容の展開が不適切であるというコメントが多く見られ、それに加えて文法や語彙の誤用が目立つことにより、誤用を補って文意を汲むための助けが文脈から得られず、そのことが結果として分かりにくいという評価に結びついたものと考えられる。この点は、文法面での誤用があっても、その箇所を推測して文意を理解することができるかと評価された作文Aとは対照的である。

作文Bへのコメントで注目すべき点として、留学生のみが肯定的に評価している項目が見られる。それは、具体例が多く示されたこと、その例示に伴って列挙表現が使用されていること、および、です・ます体が使用されていなかったことである。それに対して、教員の記述したコメントには、このような点を肯定的に評価したコメントは見当たらなかった。

以上のように教員と留学生の評価の差異が見られることから、たとえば、留学生側から見れば、具体例を多く挙げて分かりやすい作文を執筆したつもりでも、教員の側からは芳しい評価を得られないというケースが想定される。こうしたケースでは、一篇の作文を労して執筆した留学生本人にとっては、正当な評価が与えられなかったという不満感につながる可能性があり、このような教員と留学生の見解の相違は一考を要するものであろう。

ここで、作文Bについて、留学生が評価した点である、普通体の使用、列挙表現の使用

には共通していることがある。それは、いずれもそれぞれが形式面に關わる項目であり、その使用は、文章の内容理解において比較的ローカルな範囲にしか影響を及ぼさないものであるということである。たとえば、「たばこは健康に害を及ぼす」と「たばこは健康に害を及ぼします」という表現を比べた場合、です・ます体の使用が文意の理解を阻害するとは考えにくい。それにも関わらず、留学生のコメントにおいて、です・ます体を用いないことが肯定的に評価されているのはなぜであろうか。それは、レポートや論文などのアカデミック・ライティングにおいては普通体で書くと指導されているという点を根拠として、それを過剰に評価し、普通体で書いてあるということは、論文調なのだからわかりやすいはずだ、というような思い込みが形成されているからではないだろうか。

また、列挙表現として、作文Bにあるような「第一に」「第二に」という表現が用いられたとしても、その表現を使用すること自体が文章の内容理解や適切な展開に有効であるのではなく、列挙して例示することにより、どのような結論を導くのかといった一貫性が構築できなければ、単に既知の表現を機械的に羅列しただけになり、本来の機能を果たすことはかなわない。このような側面からは、作文Aよりも作文Bのほうが分かりやすいと評価した留学生の場合、使用する表現形式にやや偏って評価している傾向がうかがえる。

さらに、作文Bでは、具体例の列挙が、教員による評価においては、かえってマイナス評価を招く要因となっている点は注目に値する。作文Bにおける具体例の列挙は、ある留学生には、プラス評価を与えるものとなっているにもかかわらず、留学生の中にも、これをマイナス評価する評価者が存在する。教員については、1名がそれをプラス評価したにとどまり、大方の教員にとっては、具体例の多さが「話題が散漫」という印象につながっている。つまり、具体例を列挙するというストラテジーを用いても、それが主張に向けて何のために用いられているのか、主張とどのようなつながりを持つのか理解されなければ、かえって評価を低めてしまうことになりかねない。また、留学生のコメントを見ると、具体例のそれぞれが理解しやすい内容であることが評価されているが、これは、個々の内容について理解できたという点だけを評価したにすぎない。作文Bにおいて、具体例のわかりやすさを評価した学習者は、その部分だけにしか着目できておらず、それら相互の関連、また作文全体を通した内容の一貫性を把握できていないことになる。そのため、具体例を列挙するという表現の形式的な習得よりも、それによってどのような結論へ導こうとしているのかという内容的な構成力の有無が、分かりやすい作文執筆には欠かせないと考えられる。

6. まとめ

以上の調査結果より、教員が分かりやすいと評価した作文は、分かりにくいと評価された作文に比して、留学生における評価においても、相対的に分かりやすいと評価されることが明らかになった。その評価に際して、評価理由として挙げられた点については、分かりやすさ、分かりにくさのいずれにおいても、内容や構成の良し悪しが重要視されている。文法の正確さについては、内容や構成がよければ、文法的誤用を補って理解できるという点から、評価を下げる直接的な要因になりにくいことがうかがえる。この点に関して、作文の評価において、単に文法的正確さや文型の習得のみが作文の評価を高めることはなく、それよりも全体の構成が重視されるという先行研究（長谷川，堤2007a,b）での知見を確認できた。

今回の作文Bのコメントに見られたように、教員と留学生において、評価の良し悪しが一致しない場合は、その着目点が異なっていることがある。留学生のコメントにおいて、文体や列挙表現のような形式的で部分的な側面に対する肯定的な評価が見られた一方で、これらは教員からのコメントにおいては高い評価をもたらす項目とはみなされておらず、むしろ、構成や論理の一貫性等、内容的および全体的な観点から評価していることがわかった。列挙表現のような、いわゆる機能表現や機能文型の無目的な習得や使用は有用性が低いという点は、アカデミックライティング能力を日常的に要求される留学生や日本語学習者に対して、作文執筆の際には意識喚起を要する点であろう。

以上、本稿では、日本語学習者としての留学生が、日本語非母語話者の執筆した作文を比較して分かりやすさを判断する場合、どのような点に着目するかを調査し、その概略を報告した。これは、日本語非母語話者の作文評価におけるピリーフの一端を探ることにつながるものと見られる。このような作文評価におけるピリーフは、作文執筆におけるピリーフとも関連があるかどうか、また、自らが執筆する作文は、自らが評価する側に立った際のピリーフを反映したものになるかどうかという点については、今後、周到な調査、および検証が必要であると考えられる。

付記：本稿は、平成18-19年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「誤用とその問題点の分析に基づいた日本語アカデミックライティング教材の開発」(課題番号18520415) による研究成果の一部である。

参考文献

- 池田玲子・館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』
ひつじ書房
- 宇佐美洋(2007)『日本語学習者の書き言葉に対する対照言語学的・文章論的研究』平成
17-18年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)課題番号17520360)研究成果報告
書
- 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂(2005)『ピアで学
ぶ大学生の日本語表現—プロセス重視のレポート作成—』ひつじ書房
- 田中信之(2005)「中国人学習者を対象としたピア・レスポンス—ビリーフ調査をもとに」
『日本語教育』126号, 日本語教育学会, pp.144-153
- 田中真理(2007)『第二言語によるライティングについての基礎研究: Good writingとは
何か』平成16-18年度科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号16520321)研究成
果報告書
- 長谷川哲子・堤良一(2007a)「「分かりやすさ」を決める要因は何か?—どのような文章
が分かりやすいと評価されるか—」『2006年度日本語教育学会第10回研究集会: 関
西地区 予稿集』pp.65-68
- 長谷川哲子・堤良一(2007b)「大学教員による非母語話者作文への評価について」『第9
回専門日本語教育学会研究討論会 発表要旨集』pp.18-19
- 長谷川哲子・堤良一(2008)『誤用とその問題点の分析に基づいた日本語アカデミックラ
イティング教材の開発』平成18-19年度科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号
18520415)研究成果報告書
- 原田三千代(2006)「中級学習者の作文推敲過程に与えるピア・レスポンスの影響—教師
添削との比較」『日本語教育』131号, 日本語教育学会, pp.3-12